

5月



郡上市観光連盟公式サイト

<http://www.gujokankou.com/spot/06meihou/1265.html>

あの日のあの川 リレー日記 ～第28話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第28話主人公 前田紗希

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：愛知県木曽川)

「3.2.1」

いつのこと？：小学生と今

どこの川？：吉田川

小学校2年生の時だったでしょうか。当時スイミングスクールに通っていたわたしは、そのスクールが主催するサマーキャンプに参加したことがある。

スクールの入り口に大きく張り出してある宣伝を見たのと、他の子が参加しているのを知ってうらやましく思ったわたしは、母に行きたいとせがんだ。母は承諾してくれて、わたしは学校の友達と二人で、そのサマーキャンプに申し込んだ。

小学校2年生である。家族から離れて寝泊りするの初めてだった。もしかしたら前日にやっぱり行きたくないと親に言ったかもしれない。不安な気持ちから不機嫌になったかもしれない。わたしはいつもそうなのだ。ちょっと勇気を出してみるものの、直前になると尻込みする。ともあれ、わたしが言い出したのだし友達を一人で行かせるわけにもいかない。期待と不安で胸をいっぱいにして、翌朝早朝にスクールを出発するバスに乗り込んだ。バスの中の多くは知らない顔だった。

行き先は郡上八幡だった。郡上八幡は小京都と呼ばれるように歴史ある古い町並みが有名だが、水の町としても知られている。町の中にも水路がめぐらされ、風情を醸し出している。その町中の水路に流れ込んでいる川が、吉田川、今回の

話の舞台となる川である。

その日宿泊するコテージに到着したわたしたちは、水着に着替え、安全講習を受けて、みんなで歩いて川へと向かった。川にたどり着き、最初にその澄んだ水を見たときの衝撃は、今も強く心に残っている。わたしはその時まで、あれほど澄んだ川を見たことがなかった。吉田川は、清流長良川を源流とする川で、岐阜県の名水 50 選にも選ばれている。しかしそんなことを知るのはずと後のことである。愛知県に生まれ育ち、家の前に流れる薬師川（これを書くにあたり調べたため、今の今まで名前すら知らなかった）は同じく木曽川水系ではありながら、川というよりも小さな小さな汚れた用水路、という環境で過ごしていたわたしは、この清くて美しい水の流れにそれは感動した。水のきらめき、透き通った水の向こうに見える魚のシルエット、反射する太陽の光、木の陰影、葉擦れの音、むせかえるような真夏の草のにおい。今でもありありと思い出せる。水に足をひたすと、とても冷たくて、また驚いた。冷たい冷たいと言いながら、足をつけたり引っ込めたりして散々はしゃいだ後、泳いだり潜ったり、流されてみたり、足がつかないところまで行ってみたりした。しかしあまりに水が冷たくて、長くは入ってられず、結局はほかの子が泳いでいるのを尻目に、水際で石を積んで魚を囲ったり、足をひたしながらおしゃべりしたりしていた。

お昼ご飯は川の脇の道で食べた。確かおにぎりか何かだったと思う。照り付ける太陽で温まったアスファルトの熱は、水に入ってすっかり冷えた体には心地良く、アスファルトに座って暖を取りながら食べた。外で食べるご飯というのは、どうしてあんなに美味しいのだろうか。そうして午後は、もう泳ぐことはあきらめて、生き物を捕まえることに熱中した。箱めがねを使って水中の様子を見ながら、石をひっくり返してカニや川虫を探したり、ちちこ（ちちぶのことをこう呼んでいた）を捕まえたりした。一緒にいた男の子が、カメがいるというのでみんなで見に行ったりもした。このころには、見知らぬ顔だった子たちとはすっかり友達になっていた。

一日中遊びまわり、心地よい疲労感と倦怠感に包まれて帰ったわたしたちを出迎えてくれたのは、よく冷やされたトマトとキュウリだった。コーチが配ってくれるのを一人ひとつずつ受け取り、塩をつけて食べた。わたしはこの時までキュウリが苦手だった。あの青臭さがどうしても受け入れられなかったし、正直に言えば、今でもそれほど美味しいと思って食べてはいない。しかし、この時ばかりはこのキュウリが本当に美味しく思え、徐々に夕闇に沈んでいくテラスでキュウリをかじりながら、充実感で満たされた気持ちになっていたことを覚えている。また、夜になるとみんなで蛍を見に行った。田んぼの脇のあぜ道を歩いていると、田んぼの上空に、黄色い小さな光が、ふわふわと無数に飛んでいるのを見た。後にも先にも、あんなにたくさんの蛍を見たのはあの時だけである。

満喫した二日間だった。

一泊二日の日程を終えて家に帰ったわたしは、行く前よりも、少しだけ成長したような気がした。自然の中で過ごした最高の思い出のひとつとして、また、初めて家族から離れ、知らない子たちと過ごした経験として、あの二日間は今も鮮明に胸に残っている。

しかし、わたしにはひとつだけ心残りがあるのだ。それは、川に飛び込めなかったことである。あの時、男の子たちに人気だったのが、川への飛び込みだった。吉田川は、飛び込みの名所として地元の子供たちに親しまれている。わたしはあの時、飛び込みたいという気持ちはありながらも、少しの恐怖心と、男の子に混ざっていく勇気のなさ、失敗した時にみんなに見られたら恥ずかしいという思いから、挑戦できなかった。そのことが、ずっと心に残っているのである。

安全上の観点から、吉田川での飛び込みは、度々禁止されているようだが、それが一昨年、思いがけずリベンジを果たした。わたしの通う大学には水深 5m のプールがあり、飛び込み台が設置されているのだが、そのプールに数人で行った際に、みんなで飛び込もうということになったのである。3、2、1。心の中で一人掛け声を掛け、飛んだのは 7.5m の高さ。わたしはついに、あの夏のリベンジを果たすことができたのである。

最後に、わたしにとって川は、人間も動物も虫も木々も、生き物すべてが友達で、世界がもっと色鮮やかだった頃を思いだし、子供だったあの夏に戻れる場所である。

(次は堤陽星さんにバトンを託します)